

I-JAS データの社会文化的考察
A sociocultural consideration of I-JAS data

トムソン木下千尋(UNSW, Sydney)

本発表は、International Corpus of Japanese as a Second Language (I-JAS) を社会文化的視点で考察するものである。I-JASは国立国語研究所が中心になり、12の言語背景を持つ日本語学習者と日本語母語話者の話し言葉データと書き言葉データを集めた言語コーパスだ。第二言語としての日本語のコーパスとしては最大規模で、学習者1000名、日本語母語話者50名のデータが順次公開されている (<http://lsaj.ninjal.ac.jp/>)。一方、社会文化アプローチの視点では、人の営みは何らかの社会文化的な文脈の中で起こるとし、言語も社会文化的な相互行為を通じて構築されると捉える。コーパス研究の基本的な考え方は、データから何らかの普遍性を探ろうとするものであろうが、社会文化アプローチの考え方は、本質的な「日本語」あるいは **"the Japanese"** の存在を疑問視する。「ことば」は、過去の歴史や、話者の家族、友人の言葉を踏襲し、その人の故郷の何世代もの話し言葉も含めたモザイクであり、「私のことば」は、私が今、この特定の場面で、様々な要因に影響を受けながら話しているものだと考える。

本研究では、I-JASの英語母語話者データと中国語母語話者データ、さらに日本語母語話者データを使い、I-JASデータとはどんなものなのか、つまり、I-JASデータはどのような社会文化的文脈に埋め込まれているのか、さらに、データ収集のプロセスで何が起こっていたのか、すなわち、どのような社会的相互行為により、どのような言語がデータ収集を媒介したのかを考察した。結果、以下のことが分かった。I-JASデータは「データ収集」という特殊なプロセスに埋め込まれており、その状況が、海外の学習者にとって貴重な日本語母語話者との一対一の会話のチャンスを提供していた。また、I-JASデータは調査者と学習者の両者によって共構築されており、調査者と学習者のその時、その場所での相互行為により生まれたテキストの集まりである。そこには「日本語」、**"the Japanese"** はない。

この研究から示唆される課題は、まず、I-JASを使って研究する際、研究者がとるべき立ち位置はどんなものなのか、そして、I-JASデータの特質は、研究の中でどのように記述されるべきかを考慮することの必要性である。

